

古代叙事詩における戦争と平和

——ホメロスとウェルギリウス——

小 川 正 廣

1. 『イリアス』における戦争と平和

ヨーロッパ文学は古代ギリシア詩人ホメロスの『イリアス』から始まるが、この英雄叙事詩として知られる長篇詩が語っているのは、ギリシア人とトロイア人の間に起こった戦争、すなわち神話として伝えられるトロイア戦争である。平和ではなく戦争の物語が今日まで西洋文学の最古で最大の古典として親しまれ続けてきたことには、さまざまな理由が考えられるであろう。まず、平和を当然のように享受できる時代に生きる人間にとっては、戦争は日常から離れた世界の出来事であり、戦争の文学は通常体験できない冒険や危機などの緊迫した事態を想像の中で味わわせてくれる。また、戦争では多くの場合、最終的な結果や先の成り行きを予想するのは難しいから、安定した社会の暮らしの中では思いもよらない大きな形勢の急変や、それにとまなう個人と集団の意識の大変動が起こるものである。戦争の文学は、そのような人間の内外に起こる異常な状況の変化を読者の前に描き出し、我々の感情と知性の中に社会と人間についての未知の反応を呼び覚ましてくれる。

(1) 名誉の戦死

しかし、太古の戦争の物語『イリアス』が現代の読者においてもなお強い関心を引いているとすれば、その最大の理由は、そこに登場する英雄たちが人間の名誉というものに対して非常に重要な価値を置いていて、その特異な価値観が、多くの場合彼らの行動を支配し、さらには戦争のゆくえを決定する最大のファクターとして語られていることであろう。名誉のための戦いとか、あるいは「名誉の戦死」というような言葉は、例えば日本においてもほんの半世紀少し前まで真剣なニュアンスを帯びて人々の口から発せられていた。現在ではそれらの言葉はほとんど死語となった感があり、時代遅れの古びた通念を風刺するときくらいにしか使われないが、それらが社会的な標語の一つとして生きていた時代は、たしかに歴史において最近まで存在したのである。とはいえ、日本人にも一昔前まで耳慣れたそのような言葉は、名誉に命を賭けるという点ではホメロスの英雄たちの人間観と通じているように見えるが、しかし、いったいどのような名誉のために戦い、また誰の名誉のために死ぬのかということになると、大きな相違があると言わねばならないであろう。

『イリアス』で描かれる戦争は、ギリシア人とトロイア人の間の民族の争いである。神話によると、トロイア人のパリスがギリシアのスパルタの王妃ヘレネを奪ったためにその戦争が起こり、ヘレネの夫スパルタ王メネラオスの依頼を受けた彼の兄ミュケナイ王アガメムノンがギリシアの軍隊を編成して、トロイアの都への攻撃を開始したと伝えられる。一方トロイア人のほうも、膨大な財力と神々の守護と味方の英雄たちの武勇によって都を守り、攻防戦は十年にまでおよんだ。その間、パリスとメネラオスの二人の当事者同士の間による戦争終結の試みもなされたが、それは神の介入によってたちまち失敗し、結局勝敗は二つの軍隊の実力戦に委ねられることになった。そこで、両軍の最前線に立つ二人の英雄の働きが戦争のゆくえを左右するものとして注目される。焦点となった人物は、ギリシア方ではアキレウス、トロイア方ではヘクトルである。もちろんギリシア軍にもトロイア軍にも、ほかに豪勇の士が多数そろっていた。しかし、アキレウスが総大将アガメムノンと仲違いして戦線を離脱したとき、ほかのどの戦士も敵将ヘクトルの攻勢を阻止することができず、ギリシア軍の敗色はしだいに濃くなる。こうしてヘクトルの攻撃を食い止められるのはアキレウスだけであることが明らかになり、アキレウスは、友人パトロクロスがヘクトルによって殺されたあとようやく戦場に復帰して、仇敵ヘクトルに対して決闘を挑むこととなる。そしてこの英雄は、その単独の戦闘でヘクトルを倒し、トロイア滅亡の運命を決定づける。

この物語の中でホメロスが描くアキレウスの行動は、終始「名誉・誉れ」(time, kleos)の観念に支配されている。そもそもアキレウスがアガメムノンといさかいを起こしたのは、総大将が彼の「名誉の印」(geras)である捕虜の女性ブリセイスを奪ったためであり、また味方が不利な状況に陥ったのちに戦場にもどったのは、友人の復讐のために最大の敵を討って「不滅の誉れ」(kleos apthiton)を獲得するためである。ただし、アキレウスの求める誉れは、明らかに個人としての英雄の名誉であり、けっしてギリシア民族の名誉でも、また彼が率いるミュルミドネス族の名誉でもないことが戦争の物語『イリアス』の大きな特徴であろう。もしも彼がギリシア人全体の名誉のために戦っていたとしたら、アガメムノンに対してあれほど激しい怒りを抱いて戦争から退き続け、ギリシア軍が敗退寸前の窮地に追いやられるのを見過ごすことはできなかったであろう。さらに、結局アキレウスが味方を救う行動を開始したのも、ギリシア軍のためではなく、自分自身の名誉のためであった。他方、ヘクトルもまた、たしかに愛国心の象徴のような人物として描かれてはいるが、しかしアキレウスの挑戦を受ける決意を固めたとき、自己の名誉を優先して無敵の相手との危険な勝負に向かっていく。そして彼は敵に討ち取られた結果、自国を滅亡の危機に陥れてしまう。ヘクトルがアキレウスと正面から対決しなければ、トロイアにはまだ存続の望みはあったのだが、彼は味方の敗北を前途に十分予想しながらも、英雄としての「名誉の戦死」を選んだのである。

それに対して、過去の日本人の「名誉の戦死」は、明らかに自分のためよりは、むしろ主君や祖国のために戦死することであった。もちろん主君や祖国のために死ぬことが、同時に自己の名

誉にもなると考えられたことは確かである。しかし、もしも主君や祖国のための戦いと自分の望む戦いとが一致しない事態が生じたとしたら、どうなったであろうか。例えば、主君や祖国を守るために、死なずに生き続けるようにと主君自身や祖国の人々から強く要求されながら、それでもあえて敵と戦って殺されたなら、その人ははたして「名誉の戦死」を遂げたことになるであろうか。日本人の伝統的な観点からは、そのような死は「名誉」ではなく、むしろ「不名誉の戦死」として非難や擧蹙的になったはずである。ところが『イリアス』においては、例えばヘクトルは、祖国を救うためにけっして強敵アキレウスとは戦わないでほしいという父プリアモス王の切なる願いを断固として退け、祖国の利害に反する決闘で討たれてしまうが、結果として彼は、敗れたとはいえ、自分の期待通りに英雄としての名誉を得ることになる。実際、叙事詩の全篇は、彼の死を激しく悼むトロイア人たちによる荘重な葬儀と彼の遺体の埋葬で終わっているのである。『イリアス』において戦争は、このように、何よりもまず個人としての戦士に名誉をもたらす場として設定されており、したがって戦場を表現する際、「男子の誉れを生む戦場」(makhe kydianeire) という定型句 (formula) がたびたび用いられている。

(2) 運命としての戦争

ところで『イリアス』で語られた戦争に関して、もう一つ強調すべき点は、この英雄叙事詩の世界においては、戦いは最初何らかの原因で人間が引き起こしたにせよ、しかし究極的には、神々や運命といった人間を超越したものがもたらす不可避な状況であると見なされていることである。そして、その宿命的な成り行きに対して、人間はひたすら耐え忍ぶべき存在であると考えられている。

例えば、トロイア戦争を誘発させたのは、ヘレネを奪ったパリスであるが、トロイア方の指導者ヘクトルはそのために弟パリスを非難することはない。たしかにパリスがヘクトルによって叱責される場面はあるが、しかしそうした場面では、この美男の英雄は、美女の王妃を誘拐して大戦争を引き起こした張本人としての責任を追及されているのではなく、むしろ一人の英雄として戦場でまともに戦う気力に乏しいために咎められているのである (3.39ff., 6.520ff.)。また、この神話的戦争の最大の受難者として登場するのは多くの子孫や民を失ったトロイア王プリアモスだが、しかし、物語の結末においてこの老王が息子ヘクトルの遺体返還のためアキレウスに嘆願を行なう場面 (24.468ff.) では、戦場でのアキレウスの無慈悲な戦闘の是非については問題になっていない。その場面でプリアモスは、相手が「多数のわが子を殺した恐ろしい殺戮者」(24.479) であるにもかかわらず、彼の手来接吻までしてひたすら寛恕を乞うのみであり、その命がけの真摯な行動は、自己に大きな不幸をもたらした敵をいかに憎んでいても、戦争そのものは運命として甘受するのが人の道理であるという認識を示している。

このとき嘆願を受け入れたアキレウスは、敵国の王の嘆願に込められたそのようなメッセージを理解して、次のように述べている。「ともあれ、われらはいかに悲しくとも、／苦悩は胸の中

にそっと眠らせておきましょう。／身も凍るような慟哭は何の役にも立たないのだから。／そのように神々は、哀れな人間どもに悲しみつつ生きるようにと／運命の糸を紡がれたのです」(24.522-6)、と。『イリアス』では、アキレウスは敵将ヘクトルを討ち取る決心した時点で、やがてみずからにも死が襲いかかる運命を受容したと語られている(18.94ff.)。物語の前半においては、この英雄はアガメムノンに対する怒りのために戦場を離れ、トロイアで戦うことをやめると宣言したが、そのために友人パトロクロスを失う結果となった。そのような成り行きを神々が「紡いだ」運命の因果として認めた彼は、今あらためて戦士としての人生をまっとうする決意を固める。つまりアキレウスは、戦争から逃れようとしても逃れられない人間の宿命を悟ったのであり、そして最後の場面では、彼は敵味方の境界を一時的に超越して、戦争と人間についてのそのような深い認識をプリアモスと共有したのである。

戦場はたしかに「男子の誉れを生む」場であり、ホメロスは戦闘における勝者の栄光を語っている。だがこの詩人は同時に、戦場が人間に災いと苦難をもたらす場所でもあることを、登場人物の言葉や行動を通じて繰り返し表現している。そしてホメロスの定型句には、戦争の悲惨や戦いの恐ろしさを表わす語句も多数見いだされる。実際、「男子の誉れを生む戦場」(makhe kydianeire) という定型句と並行して、同じ「戦場・戦闘」(makhe) という言葉に、「つらい」(drimeia)、「悲涙をさそう」(dakryoessa)、「悲嘆をもたらす」(alegeine) といった、逆に人間にとっては好ましくない、否定的なニュアンスの形容詞がしばしば付けられている。また「戦争」(polemos) という言葉に対しても、「痛ましい」(oizyros)、「有害な」(kakos)、「苦しい」(argaleos)、「涙にみちた」(polydakrys)、「人を滅ぼす」(phthisenor) などと、たびたびネガティブな修飾詞が用いられている。

さらに『イリアス』では、戦争の状況は、いつ、どのような終わりを迎えるのか明確には語られていない。たしかにヘクトルが倒れたあと、やがてトロイアが滅亡することは、物語最後の痛ましい葬儀の模様によって予示されている。そして後世の読者である我々は、ホメロスの時代の聴衆と同様に、トロイア陥落の事件についてのさまざまなエピソードを知っているため、『イリアス』の中の戦争の結末に対する暗示や予告を容易に読み取ることができる。しかし他方、もしも読者がそのような予備知識を持たないならば、トロイアの平原での戦闘は、ヘクトルの葬儀のための短い休戦のあと再開され、その後来る日も来る日も連綿と続いていくような感覚を与えるであろうことも否定できない。十年にわたる長いトロイア戦争の中のごく短いタイム・スパンに物語の内実が集中しているため、なぜこの戦争が始まり、その後ほぼ十年の間にどのように進んできたのかについても、一定の予備知識がなければその全体的な輪郭を思い描くことは不可能である。始まりも終わりも明示されない戦争の語りは、戦争という事態が神々から人間にもたらされた宿命だという『イリアス』で反復されるメッセージと相まって、戦争という状況が人間に定められた永続的な存在様式であることを強く印象づけている。実際、第14歌でオデュッセウスは、戦争を中止しようと提案したアガメムノンに強く反対して次のように述べている。

ゼウスはわれらに、
若い頃から老年にいたるまで、めいめい死に絶えるときまで
苦しい戦いを、糸玉を巻くように果たし終えるようにと定めたのだ。 (II.14.85-7)

このように『イリアス』において戦争は、戦士が名誉を獲得する場であるとともに、それにかかわる人間に死ぬまで課せられた状態であり、さらには個々の人間の生死も越えて果てしなく続いていく宿命的な営みとしてとらえられている。

(3) 戦争と平和

そこで、現代の読者は、『イリアス』を読みながら、ふと思うのではないだろうか。ここには、戦争を人間の運命として受けとめ、その苛酷な条件の中で誉れという人生の輝きを追求する人々が描かれているが、はたして戦争こそがそのように人間存在の恒久的な条件であると考えるのは、人間とその社会のあり方を規定するうえでふさわしいのだろうか、と。たしかに、戦争は人間の生存条件だというメッセージを比喩的ないしは形而上学的にとらえるならば、この『イリアス』の根底にある思想は真実をとらえていると言えるだろう。戦いと闘争こそが人間の生きる姿であり、また人が歩まねばならない道だということを、我々は日々の体験にもとづいて理解することができる。そしてラテン語の古い諺「生きることは戦いである」(vivere est militare)は、人間についての永遠の真実を語っているように思われる。だが我々はまた、人生は戦いであるという言葉に同意すると同時に、人生は戦いだけではないことも知っている。例えば、ローマの文人キケロが残した「生きることは考えることである」(vivere est cogitare: 『トゥスクルム荘対談集』5.111)という言葉に、我々は深くうなずくであろうし、また「閑居の人生は王国なり」(vita otiosa regnum est)という奴隷出身のローマ作家プブリウス・シュルスの名言にも、大いに共感を覚えるであろう。

人生は戦いだけではない。『イリアス』は、これまで述べたように、たしかに戦争を人間存在の普遍的な条件であるように描いている。ところが、じつはそれとは一見背反するこの真実もまた、さまざまな形で作品の中で示されている。そしてホメロスの戦争観を正確に理解するには、そのような部分にも注意を向ける必要があるだろう。永続的な戦争状態の中で、それとは異なる世界を垣間見させるのは、まず、戦場で戦士たちが討たれる場面においてたびたび述べられる死者に関する回想である。それらは、一種の「死亡者の略歴」(obituary)であり、そこには当人の故郷、出生、生い立ち、年齢、両親や妻子、兄弟など家族や友人のことが簡潔に語られている。そのような短い回想文によって読者は、冷たい死体となっていく多くの戦士たちの背後に、彼らから永遠に切り離された温かい生命の世界と美しい自然が存在していたことを想像できるのである。次に、ホメロスが叙述の中で用いる比喩もまた、しばしば戦争の外側にある世界を覗かせる。それらの比喩は、多くの場合のどかな自然や平和な田園風景や平凡な人々の日常生活を描いてお

り、物語の中で連綿と続く戦闘の破壊的行為とは対照的に、自然の秩序と、それにもとづく安定した生産の営みもまたこの世界に実在していることを印象づけている。

『イリアス』の中で戦争とは異なる平和な世界を最も大きな規模で集約的に語っているのは、第18歌のアキレウスの盾の描写である(478-608)。英雄の母テティスが神へパイストスに造らせたその大きな円形の盾の中央部には、大地と天空と海が描かれ、最も外側には地球を取り巻く大河オケアノスが流れている。その間には、三つの層が円周形の帯をなして、それらの層の中にさまざまな人間の生活が描かれている。最も内側の第一の円周には、二つの町があり、そのうちの一つは婚礼や集会場での裁きで賑わう平和な社会の情景を示している。他の一つは戦争の状態にあり、城壁を取り囲む敵の軍隊と戦っている。二番目の円周には、田園での耕作、収穫、牧畜など四季折々の仕事の模様が描かれ、三番目の円周では、若者や娘たちが楽しげに舞い踊っている。

このようにアキレウスの盾には、平和な社会と豊かな自然の中での人間のさまざまな営みや経験が描かれ、同時にまた、第一の円周に見られるように戦争を行なう人々の姿も描写されている。戦いだけが人生ではない。そのことをホメロスはよく認識していて、この盾の描写において、戦争という行為を人間の他の多くの営為と並べて描き、それを大きな世界の中に位置づけて示そうとしたことは明らかである。そして、ここに描かれた他の営為を詳細に見ると、そこには交易や航海といった当時のギリシア人の重要な活動が含まれていないことに気づくだろう。このことから、詩人は叙事詩の文脈から離れた世界の縮図(microcosmos)を盾の絵柄として示しているのではなく、むしろ作品のテーマである戦争との対比を念頭に置きながら、とりわけ地上で安定して繁栄する社会に生きる人々の平和な暮らしを意図的に描こうとしたことがわかる。すなわち、詩人は英雄の盾の描写を通じて、戦争を平和と関係づけてじっくりと眺める視点を読者に提供しているのである。

それでは、ホメロスは戦争と平和との関係について、いったいどのようなメッセージを我々に伝えているのであろうか。それは、この盾の描写を『イリアス』の物語全体の文脈に位置づけることによって浮かびあがってくるであろう。

平和の中で生きる人々を描いたこの盾を含む武具一式は、主人公アキレウスが戦場に復帰する決意をした直後に、鍛冶の神によって造られた。そしてそれらは、やがてテティスの手から英雄に渡される。アキレウスの戦闘再開の決意は、ヘクトルに死をもたらすことは必至であり、さらにヘクトルの死は、トロイア民族の滅亡をも含意している。また、ヘクトルに対する勝利は、運命によってアキレウス自身の死をも決定づけることになる(物語の最初から示されるように、アキレウスはトロイアで戦い続けるならば早世することが宿命づけられていた)。英雄の新たな盾は、そのように、トロイアやアキレウスやヘクトルという地上で最も大きな価値を体現する社会と人間が、最終的な死滅に向かってもはや後もどりでできない確実な歩みを開始するちょうどその瞬間に、読者の前に提示されるのである。盾に描かれた人間たちの平和な生活と生命の喜びは、

最大の栄華を誇った都トロイアも、最高の栄光を獲得する英雄アキレウスも、そして勇敢な戦士ヘクトルも二度と享受することができないものである。つまり、人間は戦争によって、必ずその代償として平和な生活を失わねばならない。それは、敗者のみならず、勝者の側にもあてはまるのであり、平和を描いた盾を身に着けるアキレウスは、たとえ仇敵ヘクトルを打ち負かしたとしても、生きてみずから再び味わうことのできない世界を、あたかも消え去った幻のように掲げながら戦場に立つのである。

戦士の誉れを歌うと同時に、戦う英雄たちが払わなければならない大きな犠牲を語った文学が『イリアス』という叙事詩である。この作品では、戦争と平和の間には越えることのできない深い溝があり、戦争にかかわる人間たちは、幸福な生活の喪失を嘆く弱者にせよ、その損失を名誉の代償として毅然として受け入れる勇者にせよ、平和な世界からまったく遮断されたその冷厳な生に耐え続ける人々として描かれている。人生は戦いだけではないのは確かである。しかし、人間は必ずしも思いどおりに人生を選べるとはかぎらない。ホメロスが語る人間たちの戦争は、神々からもたらされるものであり、平和は過去の思い出や幻影として、戦争の厳しい運命を鮮明に際立たせる役割を果たしている。

2. 『アエネーイス』における戦争と平和

名誉の獲得と平和の喪失は、ホメロスが『イリアス』で提示した戦争の両面であり、詩人はこの二つの側面のいずれにも等しく注意を向けている。『イリアス』は戦争における英雄たちの栄光を讃えるだけでなく、彼らがかけがえのない生命と生きる幸福を代償にして戦いと死に向かっていくさまをあまりのままとらえている。つまり、作者はたんに好戦的でも、またたんに反戦・平和主義的でもなく（あるいは、そのどちらでもあると言えるかもしれない）、ただひたすら戦争のプラスとマイナスの実相を偏見なく把握し、公平に描き出そうとしているのである。その冷徹な視線によって、戦争とは平和を断念したところに成立する永続的な人間の営みであり、その目的は、プラスとマイナスとが相殺されて結局ゼロ、すなわち人間と社会の死滅であることが物語の展開とともに明らかにされていく。

ヨーロッパ文学がこのような戦争文学から始まったことは、大変興味深い。なぜなら、それは人間を戦う存在として規定し、そのような人間の存在様式の中核に深い悲劇性があることを認識させるからである。ホメロスの文学に内在したこの悲劇的性格は、その後ギリシア悲劇の代表的作家たちによって継承され、ギリシアの古典文学の重要な特質として普遍化されていった。しかし、そのようなギリシア文学がローマ人の世界に伝わったとき、新たな反応が起こった。

ローマ人もギリシア人と同様に、戦争においては人一倍負けず嫌いの民族である。とりわけ前3～2世紀のポエニ戦争では、ローマ人は北アフリカの交易大国カルタゴと雌雄を決し、徹底的に戦い抜いた結果勝利して、ついに地中海世界の支配権を掌握した。おそらくポエニ戦争は、西

洋世界にとって、ギリシアが東方の強国ペルシアの大軍を撃退した前5世紀前半のペルシア戦争に相当する大きな歴史的意義を担っていたであろう。ホメロスの文学は、この戦争と同時期に生きたラテン文学草創期の作家リウィウス・アンドロニクス、ナエウィウス、エンニウスなどの叙事詩の創作に影響を与えた。だが、ホメロスの叙事詩の核心をなす戦う人間の悲劇性にまで深く思念を浸透させ、それとともに、ホメロスから出発してローマ人の立場から新たに戦争の意味を考えようとしたのは、前1世紀末頃の詩人ウェルギリウスである。本論では、以下において、このローマ詩人が叙事詩『アエネーイス』の中で戦争と人間についてどのような見方を展開しているのか、それを物語の内容に即して考えてみたいと思う。

(1) トロイア滅亡

ホメロスの『イリアス』では、トロイア陥落は未来の出来事であり、その模様は語られていない。この神話上重大な事件を扱った作品は、ホメロス以降に成立した『叙事詩の環』と呼ばれる物語群に属する『小イリアス』と『イリオスの陥落』だが、それらの原作は失われ、わずかに後世の人による短い要約が残るのみである。したがって、『アエネーイス』第2歌で語られるトロイア滅亡の物語は、この重要な出来事についての神話を再構成したきわめて貴重な創作である。しかもこの叙事詩では、トロイア陥落をめぐる事態は攻撃する側のギリシア人によってではなく、敗北したトロイア人の英雄自身によって内側の視点から、克明に、臨場感と緊迫感にみちた言葉で描かれる。

戦争の十年目、ギリシア軍は困難をきわめた攻略に終止符を打つため、ついに一つの策略を考案した。それは、巨大な木馬を建造し、その中に精鋭部隊をひそませたうえで海岸に置き去りにして、ほかの軍勢は退却を装い対岸のテネドスの島陰に隠れて待つという作戦であった。トロイア人たちは敵の船団の出発を見ると、歓喜して海岸に繰り出し、大きな木馬を見つけて議論した。それを城壁の中に引き入れるか、それとも海に突き落とすなり、焼き払うなりするか、と。するとそのとき、海の神の神官ラオコンが現われ、ギリシア人の贈り物には警戒せよと呼びかけて、木馬の腹をめがけて投げ槍を放った。しかし、その槍は運命ゆえに内部の敵に当たらず、空洞をうつろに響かせただけであった。

そこへ、捕らえられた一人のギリシア兵が人々の前に連れられてくる。男はシノンと名乗り、狡猾なオデュッセウスに恨まれたので、自分は全軍の無事の帰国を神々に求めるための生け贄として殺されかけたが、逃亡してかろうじて死を免れたと言葉巧みに語るなのであった。トロイア王プリアモスはその男の話を知ると、身柄の保護を約束したうえで、敵が残した大きな木馬は何のためのものかと尋ねる。するとシノンは、やはり巧妙な作り話を語って、木馬は女神ミネルウァへの奉納品であり、それを巨大な形に造ったのは、城壁の中へ引き入れられないようにするためだと答える。もしも木馬が都に入れられたなら、トロイア人は女神に守護され、再度のギリシア軍との戦いに勝利する運命となる。それをギリシア人たちは恐れたからだと言うのである。誓い

を立てて語ったシノンの言葉を、まわりの人々はすっかり信用した。

さらにそのとき、木馬に対する疑念を解く決定的な事件が起こった。先に木馬の入城に反対したラオコンが海辺で海神に犠牲牛を捧げていると、沖から二匹の大蛇がすばやく泳いできて、上陸するや、たちまちラオコンとその二人の息子に巻きついて絞め殺してしまったのだ。その恐ろしい異変を目撃したトロイア人たちは、ラオコンが女神への神聖な贈り物を槍で傷つけたせいだと考え、女神に木馬を捧げて祈るべきだと叫んだ。こうしてギリシア人の罫は城門をくぐり、欺かれたトロイアの人々は嬉々として都の城塞のうえにそれを運び上げる。町じゅうの神殿は、祝祭の飾りで覆われた。

ここから、トロイア王国の最後の夜が始まる。すべてが寝静まったとき、島陰に待機したギリシアの船団が月明かりの中をおもむろに出発し、のろしの炎を打ち上げる。そして、都の中のシノンが海上からの合図を確認して木馬の門をはずすと、中から勇士たちがいっせいに躍り出る。彼らはやがて城門を開き、海から揚がった味方の軍勢と合流する。

こうしたひそかな敵の動向をつぶさに語るアエネアスは、もちろん自分でそれを見ていたわけではなかった。彼は他のトロイア人と同様、深い眠りに身を沈めていたのである。しかしこの時から、全体の状況を映し出していた詩人のカメラは、文字どおり主人公自身の視線にレンズをすえ、英雄の行動とともに見えてくる惨事のありさまや神秘的な現象をドキュメンタリー風に追跡していく。ここから読者は、アエネアスの目を通して生々しい陥落の場面を次々と目撃していくのである。

まず、ギリシア軍が行動を開始したとき、熟睡するアエネアスの夢の中に死んだヘクトルの亡霊が現われた。ヘクトルは、アキレウスに死体を引きずられたときと同じ血まみれの姿で出現し、「ああ、逃げよ、女神の子よ」(2.289)と呼びかける。そして、トロイアはすでに敵によって占拠されたから、国の守り神とともに都を逃れて新たな都市を探せと告げる。アエネアスは眠りを振り払い、すぐに館のうえに立つと、都の家々は炎上し敵兵の叫び声が湧き起こっている。彼はとっさに武器をつかみ、激しい怒りに燃えて、「誉れある死を遂げることのみを考える」(2.317)。

武器を持って炎の中へ向かうアエネアスのまわりには、他のトロイアの戦士たちも集まってきた。英雄は彼らに、もはや国の滅びはどうにも避けられない事態となったが、しかし最後まで勇敢に戦って死のうではないかと呼びかける。この少数の決死隊の攻撃も、いささかは功を奏した。そこで敵兵を倒して勇を鼓した仲間の一人が、奪った武具を着け敵になりすまして戦おうと提案する。だが、この策略はまもなく裏目に出る。ミネルウァの神殿から引きずり出された王女カッサンドラを奪い返すために一団となって敵の戦列に突撃したとき、予想外にも味方から攻撃を浴びたのだ。こうして自暴自棄の計略はたちまち露呈し、仲間たちは次々と討たれていった。

アエネアスは、残った二人の仲間とともにプリアモスの王宮へ向かう。そこでは敵の部隊が結集し、トロイア側も必死の防衛を試みていた。英雄は見通しのよい宮殿の屋根に登り、味方に

加勢する。そのとき敵勢は、アキレウスの息子ピュルスを先頭にして館の入り口を突き破った。館の中では、王プリアモス自身が老体を奮い起こして武装するが、すさまじい勢いで侵入したピュルスは王の面前で容赦なく王子ポリテスを討ち取り、怒って立ち向かう老王をも冷酷な言葉を放って残忍に刺し殺す。アエネーアスは、この瞬間まで恐れを覚えずに戦っていた。しかし、トロイア王惨殺の一部始終を目撃した彼は、初めて激しい恐怖に襲われる。自分の父アンキセスと妻子の安否が気になり始めたのである。ふと振り向くと、味方は壊滅していた。

英雄はただ独り屋根に残された。そのとき彼の目に、館の一隅に身をひそめたヘレネの姿が映った。そして彼の胸には、戦争の元凶となったこのギリシアの女性に対する激しい敵意がこみあげてきた。とっさに英雄は、ヘレネに向かって突進しようとする。しかしその瞬間、母神ウェヌスが立ち現われた。復讐にはやる息子に女神は、トロイアを滅ぼした原因はじつはヘレネではなく、無情な神々自身なのだと教え、彼の目を曇らせている靄を払いのける。するとアエネーアスの視界には、ネプトゥヌス、ユーノ、ミネルヴァといったトロイアに敵対する神々みずからが最高神ユピテルに駆り立てられて都を攻めている光景がまざまざと見える。

「わが子よ、すぐさま逃げよ。苦しい戦いはもうやめなさい」(2.619)、と母親は忠告する。英雄はそれにしがたい、行く手を母神に守られて父の館にたどり着く。そして早速アンキセスに逃亡を促す。だが、父親は都の陥落とともに死にたいと言い張り、頑として動こうとしない。アエネーアスは、父を残して去れないからと決意を翻し、武器を取って再び死地へもどろうとする。しかしそのとき、神は予兆を送った。妻クレウサが夫を引きとめようとして差し出した愛児アスカニウスの頭髪が、不思議な炎に包まれたのである。アンキセスは、それを見てユピテルに祈ると、神はさらに、イダ山の頂上に流れ落ちる流星を夜空に輝かせた。この第二の予兆を見たアンキセスは、もう脱出を拒まなかった。英雄は、国の守り神を抱いた父を肩に背負い、息子の手を引いて館をあとにする。一族の他の者らとも、城壁の外で落ち合うこととなった。

(2) 地中海放浪——戦争か平和か

アエネーアスは第2歌のトロイア陥落の話の中で、みずから目撃した戦争の実相についてつぶさに語っていた。それは、物理的な武力が人間世界を容赦なく破壊するすさまじい事態であり、勝者と敗者のいずれもが殺戮の狂気に支配された状態であった。その回想譚では、栄光と誉れを生む戦いとしてホメロスが語ったトロイア戦争が、あたかも陰画のように白黒反転して描かれており、ギリシア人の木馬の策略はじつは卑劣な罠にすぎず、アエネーアス自身の「誉れある死・美しい死」を求める決死の戦いも、実際は理性的判断を放棄した意味のない絶望的衝動にほかならなかった。つまりトロイア滅亡は、主人公にとって英雄的世界の価値観をくつがえす出来事だったのである。

さて、こうして廃墟と化した都をあとにして、残党が最初に到着した新たな土地はギリシア北部のトラキア地方である。そこは戦さの神マルスの地であり、トロイア戦争の血の汚れに染まっ

た場所であった。というのは、トラキア王ポリュメストルが、トロイア王から預かった若い王子ポリュドルスを黄金めあてに殺害していたからである。実際、アエネーアスが塚のうえに生えた木を引き抜こうとすると、その木から血がしたたり落ち、塚の底から「わが身を引き裂くな」というポリュドルスの痛ましい声が聞こえてくる(341)。この不吉な異変に震え上がったトロイアの一行は、王子の霊を弔ったあと急いでその地を立ち去る。

悲惨な戦争の生々しい傷跡を目のあたりに見て、再び恐怖を味わったトロイア人は、今度はエーゲ海を南下して、予言の神アポロの島デロスに着く。するとアポロは、トロイア人の最初の祖先が生まれた場所、「いにしへの母」なる地を探し求めよと命じる(394-6)。その神託を聞いた英雄の父アンキセスは、母なる地とはクレタ島に違いないと判断し、一行は勇んでその島へと船足を向ける。マルスの地トラキアとは異なって、母なる土地クレタは豊饒で平安な場所である。イドメネウスという、その島の出身でギリシア軍の将としてトロイアで戦った英雄もすでに追放されていて、平和な生活が期待できた。彼らは上陸後、トロイアの城塞の名にちなんでペルガモンという都市を築くと、その新たな都で若者たちは結婚によって家族をふやし、耕作の仕事にも励んだ。

しかしその「いにしへの母」なる地、平和なトロイアへの回帰は幻想にすぎなかった。突然天から疫病が襲いかかり、人々も作物も死滅の危機に瀕したからである。そのとき、アエネーアスの夢の中に国の守り神ペナーテスが現われ、デロスのアポロの神託は、目的地としてクレタではなく、「イタリア」という西(ヘスペリア)の土地を指していたのだと告げる。イタリアこそトロイアの最初の建設者ダルダノス王が出生した場所だというこの神の言葉に、アンキセスも誤りを認め、一行は西へ向かって再び帆を上げる。ここで初めてトロイア人たちは、目指すべき居住地としてイタリアという地名を示される。だが、ペナーテスの予言によると、その「いにしへの地」イタリアはトロイア人にとってたんなる安らぎの場所ではなく、「武器と豊饒な土壌によって強大な」(3.164)ところだという。そして神は、イタリアに建設する都には「支配を受けるだろう」(3.159)と告げている。武力による支配もまたトロイア人の使命であることについては、すでにデロス島のアポロも、「いにしへの母」なる地において「アエネーアスの家がすべての国々を支配するであろう」(3.97)と語っていた。

トロイア人の将来は、はたして平和な生活なのか、それとも戦争の日々なのか。大海をさまようアエネーアスには、そのように未来の運命の輪郭がなかなか見えてこない。そしてその後の放浪では、そうした展望の不安定さがさまざまなエピソードの中に表われている。まずストロパデス群島では、一行は怪鳥ハルピュイアの群れに戦争をしかけるが、しかし怪鳥の頭ケラエノがイタリア到着後の奇妙な予兆を告げると、急に恐れをなしたトロイア人たちは、武器を退けて敵に和平を乞い求める。次にギリシア西岸のアクティウムでは、彼らは競技会を催して武勇を競い、アエネーアス自身もその地から去るとき、かつてギリシア軍から奪った武具を一族滞在の記念として誇らしげに残していく。過去の武勲の追憶は、さらに北上してエピルス地方のプトロトゥム

においてもよみがえる。そこでは、ヘクトルの妻だったアンドロマケが、アキレウスの息子によって捕虜として連れてこられたのち、今は新しい夫ヘレススとともにトロイアをまねた城都に住んでいたのだ。アンドロマケは、懐かしいトロイアの勇士の姿を認めると、英雄の幼い息子アスカニウスのことを思い出し、「父がアエネーアス、伯父はヘクトルなのですから、／あの子はいにしへの武勇と男らしい勇気を持つよう励まされていますか」(3.342-3)と尋ねている。このトロイアのレプリカのような場所に住むアンドロマケにとっては、過ぎ去った戦争の栄光の記憶にひたり続ける生活しか残されていないのである。

まるでトロイアの亡霊そのもののようなアンドロマケとの出会いは、むしろ過去の武勇のみの世界が、もはや幻影にすぎないことを物語っている。それに対して、予言者でもある彼女の夫ヘレススは、今後の航路と難事の対処策を詳しく教えながら、無事イタリアに着けば「必ず苦難に休息が訪れるだろう」(3.393)と予告する。ところがヘレススの予言も、じつはこの重要な点については曖昧である。なぜなら彼は最後に、「イタリアの民と来たるべき戦争」(3.458)のことが、いずれクーマエのアポロ神の巫女シビュラを通じて明かされるだろうとつけ加え、そのうえ別れ際には、戦さのための武具や馬などを贈り物として与えているからである。

未来は戦いか平和か。放浪の最終段階に近づいても、そのヴィジョンはなおはっきりしない。ギリシア沿岸からアドリア海を渡って、ようやくかなたにイタリア半島が姿を表わしたとき、岸のうへの草原には四頭の白馬が見えた。するとアンキセスは、「われらを迎える大地よ、あなたは戦争をもたらすのだ。／馬どもは戦争のために武装し、この群れは戦争の脅威を示している」と叫ぶが、老人は同時に、四頭の馬が従順に和して戦車を引く様子を思い浮かべながら「平和の希望もあるだろう」と述べている(3.539-43)。

そして漂泊の最後のエピソードは、武勇か和の精神かをめぐって、オデュッセウスの冒険の場合と対比をなして興味深い。それは、トロイアの一行がシチリア島東岸で一つ目巨人キュクロプスと遭遇する場面である。もちろんアエネーアスは、オデュッセウスのように知恵で怪物を打ち負かそうと試みることはない。詩人がここに登場させるのは、オデュッセウスの仲間の一人アカエメニデスという人物である。このやつれ果てた不運なギリシア人は、たまたま上陸したトロイア人たちを見ると、自分が巨人の土地に置き去りにされた事情を詳しく語り、何とか怪物の脅威から助けしてほしいと嘆願する。その間にも、つぶされた目から血をしたたらせながらキュクロプスの巨体が近づいてくる。それを見たアエネーアスらは、まずこの哀れな嘆願者を受け入れたうえで、「黙ったまま」(3.667)ひたすら船を漕いで逃げる。「黙ったまま」逃げるトロイア人らは、一見非英雄的である。しかしここでは、同様の場面において勝ち誇って大声で豪語し、その後の大きな災いを招いたオデュッセウスとのコントラストが意図されている(*Od.*9.461ff.)。またトロイア人たちは、以前は敵だった人間の忠告と嘆願を受け入れるが、このような態度は、巨人に対する勝利に酔って仲間の諫止すら聞き入れなかったギリシアの英雄と非常に対照的であろう。ストレートな武勇に対する懐疑と、他者に対する同情と協調心は、こうして運命の目的地イタリアでの戦争の予感と平行

して反芻され、超越的な神々の定めたなりゆきに対する人間的な反応と思惑を反映しているのである。

(3) カルタゴにおける平和と戦争

カルタゴの宮殿の宴でアエネアスは、祖国の滅亡と放浪生活についての以上の物語を、次のような言葉で締めくくっている。

「これが最後の苦難、これが長い旅の終着点であった。

そこ [シチリア] を離れたあとに、私は神の力に促されてあなたがたの岸に着いたのだ。」

(Aen.3.714-5)

あたかも長い試練によく終止符が打たれたかのような言葉だが、しかし神々に示された真の終着点イタリアは、もちろんまだ英雄の前途にある。だからこの言葉は、一時的にせよ平和で安全な場所に到着した安堵感を表わしていると言える。第3歌の放浪の話では、トロイア人たちは平和な安住の地を求めようとすれば、逆に戦争の現実やその予告に直面することとなった。平和と戦争の両極の予想の間をさまよい、未来はどちらに向かっていくのかはっきりと定まらない不確定な状態こそが、英雄の遍歴の内実だったのである。

このようにアエネアスは、カルタゴへの漂着を苦難の終わりだと述べて回想譚を語り終えるが、一方ディードは、その英雄に深く心を奪われる。そして妹アンナは彼女に、亡夫シュカエウスへの貞節にこだわるのはやめてアエネアスと再婚し、トロイアの軍隊を味方につけると勧める。そのときカルタゴは、周辺の部族の戦力に囲まれていたので、そうして都の平和を固めるのが良策であり、だからあえて「望みにかなう[アエネアスへの]愛と戦う」(438) 必要もないのだとアンナは姉を説得する。国の平和と女王自身の心の平安は、こうしてアエネアスとの縁組で一挙に成立するという見通しが発生する。休息を求めるアエネアスと公私の平和を望むディード。人間のレヴェルでは、両者はともかく平和という共通の関心によって結ばれる条件が整うのである。

だが、人間と神々の双方が連動して事態が進む叙事詩の世界では、人間のもくろみはその実現のために神々に支持されねばならない。そこでディードとアンナは、神殿で神々に「平安」(pax) を祈る (4.56)。この祈りはまさに、「神々の平和」(pax deorum) というローマ独特の宗教観にもとづく神的な合意を得る行為である。

彼女らが求めた神々の平和の成立は、続くユーノとウェヌス両女神の会話の中で描かれる。その場面でカルタゴの守護神ユーノは、アエネアスの母ウェヌスに対して、「永遠の平和と結婚の契りを／成就させよう」(4.99-100) と提案し、愛の女神ウェヌスもそれを受け入れ、自分の息子に敵対するユーノとの「戦い」(4.108) を一時停止して和議を結ぶのである。そしてユーノは

早速、結婚の女神として、山へ狩りに出たアエネーアスとディードを人気のない洞窟の中で結びつける。二人の結婚による平和は、こうして神々と人間の両方の次元で固められたように思われた。

しかし、ここで実現したかに見えた人間の間と神々の間の平和は、じつは不完全なものであった。ディードはアエネーアスとの公式の結婚を宣言するが、噂の神はその出来事を不祥事として周辺地域の住民にすばやく伝え、やがてイアルバスという王が、トロイアの英雄をねたんで天界のユピテルに二人の情事について通告するのである。すると最高神はただちに、「ゆかしい世評を忘れて愛し合う男女」に対して懲らしめの目を向け(4.220-1)、メルクリウスを地上に派遣する。「おまえは今、高きカルタゴの／基礎をしき、妻に仕えて美しい都を／築いているのか。何たることだ。おのれの王国と使命を忘れた者め」(4.265-7)と、ディードを助けてカルタゴ建設にたずさわる英雄を、使者の神は厳しく叱責し、ローマ建国の「大事業の栄光」(4.272)を思い起こさせる。

このユピテルの警告と命令は、ユーノとウェヌスの間の平和とともに、アエネーアスとディードの結婚による平和をも一撃で粉碎する威力を示した。強力な神の拒否権の発動によって、もちろん天界の両女神の平和は即座に破綻したが、アエネーアスもまた、すっかり動転して、すぐにカルタゴを立ち去る準備に取りかかったのである。そしてこの時点から、地上の状況は平和から急転して、たちまち戦争の様相を帯びてくる。「艦隊を装備し、／武器を整えよ」(4.289-90)という英雄の出発準備の号令は、あたかも海軍の出動を連想させる。またディードも狂乱状態に陥って、自分を周囲の敵国の捕虜にしないでほしいとアエネーアスに訴える。そのとき彼女は、自分との結婚の盟約についてはっきり否定されると、今度はトロイア人に敵意を向け始める。

こうして神々と人間の双方の側で企てられた平和が幻のように消え去り、ただ独り孤立したディードは、自分を裏切ったトロイア人に対する復讐に着手することになる。復讐の方法は、魔術と自殺である。宮殿の中庭に火葬の薪の山を築き、アエネーアスの人形をそのうえに置いて、みずからの命を地下の神格と復讐の女神たちに捧げながら、彼女は英雄が残した剣で自刃して果てる。女王は死に際に、イタリアでの戦争でアエネーアスが非業の死を遂げるよう、そして彼女の遺骨から生まれたカルタゴ人の子孫が、いつか宿敵トロイアの民に対して報復の戦争を遂行するようという恐ろしい呪いの言葉を放っている。この呪いは、『アエネーイス』後半で語られるイタリアでの土着の民族との苦しい戦いを前触れしている。また、自害したディードの遺骸のかなたには、将来ポエニ戦争でローマ国家を存亡の危機に陥れるカルタゴの将軍ハンニバルの影が揺らめいている。

(4) 冥界への旅における戦争と平和

アエネーアスとディードの宿命的な出会いと悲劇的事件の中で、二人が求めた平和は束の間の幻影と化し、前途には大きな戦争が起こる兆しが現われていた。しかし、トロイア人たちの海の

放浪はまだ終わってはいない。カルタゴを出発した彼らは、再び嵐に遭い、シチリア島西岸に再上陸を余儀なくされる。アエネーアスは、そこで父アンキセスの墓に詣でて一周忌の供養を行ない、霊前に捧げるための本格的な競技会を催す。

シチリアでの競技会は、競漕、競走、拳闘、弓試合、騎馬行進の五種目からなっていて、全体のムードは快活で明るく描かれている。しかもここでアエネーアスは、デュードの強烈な個性に圧倒されざみだったカルタゴ滞在時とは異なり、行事全体を統括し、すぐれた競技者たちに賞品を与える主催者となって中心的役割を果たしている。一方、長々と描かれるこの競技会の描写が、『イリアス』第23歌のパトロクロスの葬送競技にならって伝統的な英雄世界の闘争精神と武勇を表現していることは明らかであろう。デュードが死の直前に告げた、戦争についての不吉で暗い結末を予感させる要素はここにはない。しかし、その楽観的な雰囲気が、かえって読者に一抹の不安を与えている。

武勇を争う競技会に不安が内在していたことは、そのあとの出来事で明らかになる。というのは、男たちが墓前での競技に熱中している間に、運命の女神がいつもの敵対心を表わし(5.604)、長い航海に倦み疲れた女たちが、ユーノの送った女神イリスにそそのかされて海岸に停泊した船に火を放ったからである。アエネーアスは現場に直行し、天のユピテルに祈る。その効あって大雨が降り、四艘を除いて大半の船は火災の被害をкаろうじて免れた。だが、先ほどまで晴れやかに競技を主催していた英雄は、思いがけない事態の発生に動揺する。

シチリアの野に住み着いて

運命を忘れるか。それともイタリアの岸を目指すべきか。(Aen.5.702-3)

と、彼はまた深く迷う。イタリアでの戦いにもそなえて悠然と戦闘力を養っていた直後に、再び平和な生活への郷愁が英雄を襲ったのである。そのとき、ナウテスという予言の力を持つ仲間の一人が、旅に疲れた弱い者らや老人たちをシチリア島に残して出発しようと提案するが、アエネーアスはなおも悩み続ける。彼が決意を固めるためには、再びアンキセスの助言がなければならなかった。その夜、父親の霊が現われて、ナウテスの忠告どおり力のある者たちを選んでイタリアへ渡り、その地での戦いにのぞむようにと指示したのである。こうしていよいよトロイアの船団は、戦争に向かう勇気ある者らだけを乗せてイタリアへ渡る。

さて、南イタリアのギリシア人都市クーマエに到着したアエネーアスは、アポロ神殿の下の洞窟の中で、巫女シビュラから次のような神託を受けている。

「おお、ついに海の大なる危難を乗り越えた者よ。

しかし陸地では、もっと大きな危難が待っている。ラウニウムの王国へ
ダルダノスの子孫たちは着くであろう。この心配は胸から払うがよい。

だが、着かねばよかったとも思うであろう。戦争だ。恐ろしい戦争と
多くの血潮で泡立つテュブリス川が目に映る。

シモイス川もクサントス川も、ドーリス人の陣営もおまえには

欠きはしまい。ラティウムには、もう一人のアキレウスがすでに生まれているのだ。」

(Aen.6.83-9)

シビュラはさらに、イタリアのテュブリス（ティベリス）川周辺での戦争の原因が、かつてパリスがギリシアの女性ヘレネを妻に迎えたために起こったトロイア戦争の場合と同様「異国の花嫁」なのだと予告する（6.93）。こうしてイタリアでの戦いは、以前のトロイア戦争のいわば再発であり、そこでは強敵として「もう一人のアキレウス」も現われると言う。シビュラによるこのアポロの神託は過去の大戦争の繰り返しを意味しており、そしてトロイア人はその戦争で敗北したから、神の言葉はけっして明るい前途を示しているとは言えない。トロイア人は、かつての滅びの運命を、苦勞してたどり着いた新天地でも味わうことになるのか。歴史は再び繰り返されるのか。そのような思いをアポロの予言は掻き立てるが、しかし神は同時に、もしかしたら今後の戦争は単純な歴史の反復ではないかもしれないという可能性も、かすかな暗示によって示している。というのは、アポロの靈感に支配された巫女は最後に、思いがけない「救いの最初の道が、／ギリシアの都から開かれよう」（6.96-7）とつけ加えているからである。

前途には必ず戦争が起こるが、しかしその戦いでトロイア人がギリシア人に助けられるだろうという言葉は意外である。イタリアでの戦いは第二のトロイア戦争の様相を帯びながらも、そこにはトロイア対ギリシアという根深い歴史的対立の構造をくつがえす契機が含まれていることを、このアポロの神託は示唆している。つまり、宿敵同士が手を結び合う事態もまた、運命によってもたらされうることを神は暗示しているのである。とはいえ、そのような対立の宿縁を超克する新たな展開は、人間が戦争の現実に対して立ち向かって初めて起こりうるものである。人間はそもそも、戦争を通してしか真の平和を作りだすことができないのかもしれない。だから、神アポロは、最後に「救いの最初の道」を示すとき、「おまえは災いに屈するな。むしろ勇敢に立ち向かっていけ」（6.95）とアエネーアスに命じている。

クレタ、カルタゴ、シチリアなど、長い地中海放浪の途上に立ち寄ったさまざまな場所で、アエネーアスは平和な生活と定住への誘惑に駆られたが、そのたびに神や亡霊の言葉に促されて運命の地イタリアを目指した。エピルス地方のプトロトムでは、予言者ヘレヌスが「イタリアに着けば必ず休息が訪れるだろう」と告げながら、同時に「イタリアの民と来たるべき戦争」についてアポロの巫女シビュラから聞くようにと教えていた。これまで目の前に見えた平和がじつは幻影にすぎないことを幾度も経験した英雄は、今そのアポロの神託を与えられ、目的地で待ち受けている戦争のかなたにしかトロイア一族にとっての真の休息はなく、その困難な戦いを回避するなら、平和にいたる道はありえないことを確かめる。「どのような苦難も、／私には予期せぬ

新たな形で起こりはしない」(6.103-4) と、彼は毅然として巫女に答えている。そしてただ一つの願いとして、地下の死者の国へ自分を連れていき、亡き父親アンキセスに再会させてくれるようにと求める。

クーマエ付近のアウエルヌス湖畔から地下へ降る前に、シビュラは冥府の女王に捧げるための黄金の枝を手に入れるようにと英雄に命じた。黄金の枝は、物語では生きた人間である英雄が死者の国を旅するための一種の通行手形あるいは護符の役割も果たしているが、さらには、金という永久に朽ちない物質のゆえに、冥界と地上を結びつけている永遠の時間をも象徴している。ウェルギリウスによると、一般に人間の靈魂は、死後には浄化のプロセスをたどりながら、絶え間なく変化していくものと考えられる。個々の靈魂に運命づけられたそのような変化は、地上の生から死後の浄化、そして多くの場合地上での再生へと、未来永劫に続いていくのである。それゆえ、英雄が地下にたずさえていく黄金の枝は、たえず変化しつつもけっして滅びることのない靈魂の生と死を貫く、この永遠の時間の流れを表象しているものと考えられる。

さてアエネーアスと巫女シビュラは、冥府への暗い道を進んでいき、やがて渡し守カロンの船が浮かぶステュクス川に着く。そこには埋葬されていない死者たちの亡霊が群がっており、その群れの中に英雄は、シチリア沖の海で落下死したトロイア人の舵取りパリヌルスの姿を見て声をかけた。すると舵取りの霊は、眠りの神に襲われた思いがけない災難の事情を語り、一緒に向こう岸へ連れていってくれと祈る。だが巫女がそれを断わり、地上で埋葬されるまで待つようにと答える。アエネーアスの冥界体験は、この最近の不運を回想させる場面から始まり、このあと一っそう以前の過去に起こった出来事へとさかのぼっていく。

カロンの船で対岸に渡ると、二人は「悲嘆の野」と呼ばれる、無情な愛ゆえに身を滅ぼした女たちがひそむところに来て、悲恋の神話的女性たちの中に混じったカルタゴのディードの姿に出会う。次の「最果ての野」の場面では、時間をさらに遡行して、七年前のトロイア陥落の悪夢が再びよみがえってくる。そこは戦争で有名な英雄たちがいる場所であり、最初にテーバイ戦争の勇士たちが現われ、やがてトロイア戦争の両軍の戦士たちの姿が見えてくる。その中には、全身を無残に切り裂かれたプリアモス王の息子デイポボスがいた。この人物は、パリスの死後ヘレネを妻にしたが、トロイア陥落の夜、寝室で深く眠っているとき、ヘレネが館に誘導した彼女の元の夫メネラオスによって惨殺されたのであった。デイポボスの亡霊の顔は、そのときの襲撃で耳も鼻も切りそがれて変わり果てていた。第2歌では、主人公自身の目に映った都の陥落の実相が語られていたが、ここでは一人の犠牲者の悲惨な姿に具象化された同じ現実が、過去の戦争に対するいまわしい思いを新たにさせている。このときデイポボスはアエネーアスの前で、「今度はギリシア人を／同じ目に遇わせてください」と神々に祈るが(6.529-30)、英雄はその言葉には何の反応も示していない。

ここからディースの城市に来て、その入り口に黄金の枝を捧げたアエネーアスは、いよいよ至福の野エリュシウムに到着し、父アンキセスと再会する。父の霊は息子との待望の再会に喜び、

英雄の問いに答えて、まず靈魂の運命について話す。それは、宇宙と人間についての壮大な哲学的啓示である。

それによると、原初より広大な宇宙を養っているのは「火のごとき精気」(6.730)であるが、天に由来するその純粋な精神は、物質と混ざり合っさまざまな生物を生じさせると、不純な個々の肉体の「牢獄」に閉じこめられて天空を見分けられなくなり、恐怖や欲望、悲嘆や歓喜の虜になる。それが、あらゆる人間が地上で営む生の姿であり、その間に生じた精神の病癩と汚れは、個人の肉体が減じたあとにも消え去らない。それゆえ肉体を去った個々の靈魂は、なお深く染みこんで離れないそれらの悪癖を洗い浄めるため、さまざまな罰の苦しみを死後に耐え忍ぶことになる。

過去の汚れを浄化することが、そのように死後の宿命であるならば、冥界での刑罰は人間の靈魂にとって最終の運命ではない。主人公がこれまで見てきた不運な人々や罪人たちの魂は、長い時間をへて浄められ、しだいに現世の悪と煩惱から解放されていくのである。しかし、至福のエリュシウムもまた最終地点ではない。靈魂はそこに長期間滞在したあと、初めて二つのグループに分かれることになる。一つは、汚れを完全に浄めて元の「火のごとき精気」、すなわち天界の純粋な精神となる少数の群れであり、もう一つは、まだ物質への執着が残っていて、再び地上の人間の肉体の中にもどっていく大多数の霊である。その後者の靈魂のおびただしい数の群れが、今アエネーアスの眼前で、レテ(忘却)の川の水を飲んで過去の記憶をすべて失い、地上で新たに生まれ変わろうとしているのであった。

このようにウェルギリウスの冥界観は、靈魂の不滅と再生という概念にもとづいて生前と死後の世界の連続性を示している点において、現世と来世の間の越えがたい断絶を説いたホメロスにさかのぼるギリシアの伝統的宗教観とは大きく隔たっている。一方、人間の生きている間の行為の是非を絶対視せず、死後にはあらゆる罪過の償いと浄化を果たして再び生まれ変わることができるというこの思想には、ギリシア哲学者ピュタゴラスやプラトン、あるいはオルペウス教などの靈魂不滅・輪廻転生説の影響が認められるかもしれない。しかし、そうした個人の運命についての教説を人間全体の歴史と結びつけ、人類の過去と未来を見通す視点にまで高めたのはウェルギリウス独特の着想である。詩人はその独自の来世観によって、パリヌルスやデイポプスに象徴される過去の不幸な歴史を生きた人々の心を癒し、彼らの不運な人生を個人の宿命として完結させず、未来のローマの運命につなげようとするのである。

したがって、このあとアンキセスが、もうすぐ生まれ変わろうとする個々の靈魂を指差しながら語る未来のローマの歴史は、たんなる愛国的な予言ではなく、すでに前半の啓示で人間の過去の苦難を総括したうえで、今度はそれらを再び地上の世界の中で意味づけるための、いわば人類救済の使命をおびた物語だと解釈することができる。その後半の話では、まずアエネーアスの晩年の息子シルウィウスがイウルスからアルバ・ロンガの王家を継ぎ、その王家出身のロムルスが、やがて「一つの城壁で七つの砦を囲む」(6.783)ローマの都を建設する。このローマ創建者ロム

ルスに続いて紹介されるのは、同じくアエネアスの血統を引く人物で、イタリアに黄金時代を復活させ、ローマの権勢を地の果てまで広げる第二の建国者アウグストゥスである。ローマ史の両端に位置するその二人の事績が格別の称賛をこめて語られると、次は王政期と共和政期の歴史的人物たちが続々と姿を現わし、ローマが武力によって世界を制覇していくことが予告される。こうして老霊の熱弁はしだいに高まっていき、未来のローマ人に対する次の言葉で締めくくられる。

「ローマ人よ、心に銘じておくのだ。そなたが熟達すべき道は、
権威によってもろもろの民を治め、平和のために法をしくこと。
服従する者は許し、傲慢な者を制圧することである。」 (Aen.6.851-3)

ロムルスが建国するローマは、その後の歴史においてイタリアと地中海周辺全域を戦争で征服し、アウグストゥスの時代には激しい内乱も平定されて、未曾有の大帝国が確立する。これが、トロイア人の子孫が歩む運命であり、トロイアはローマの発展によって、みずからを滅ぼしたギリシアに対して完璧な報復を果たすことになる。しかし、もしもローマ帝国の成立が過去の敗北に対するたんなる復讐にすぎないなら、トロイア人の放浪やイタリアでの戦い、さらにはその後一千年以上にわたるローマ民族の闘争の歴史的意義は大きく失われるだろう。なぜなら、その場合、戦争の価値は勝者のトロイアとローマの側だけにあり、歴史の中で果てる敵味方双方の犠牲者の命が償われることはないからである。戦争の歴史の終着点が、戦争そのものの終焉と法による平和な秩序の実現であることが確認されて初めて、戦争は意味のある行為となり、ローマ帝国の存在は正当化されるのである。そのことを子孫が背負うべき運命の結論とするこのアンキセスの言葉は、おそらく詩人と同時代のローマ人たち、とりわけ元首アウグストゥスその人にも向けられたメッセージでもあろう。

こうしてアンキセスの予言は、未来のローマ人の使命が世界の支配と揺るぎない平和の確立だということを強調して終わる。その間、アエネアスはずっと黙っていたが、ふとある青年の霊を見て、あれは誰かと尋ねる。すると父は、突然目に涙を浮かべ、若くして死ぬ定めマルケルスなのだと言う。前23年、アウグストゥスの甥で将来を囑望されたマルケルスは19歳で他界した。この最近の痛ましい死も、詩人は太古からの運命の中に位置づける。あたかもローマの平和の安定のためには、なお神々への新たな犠牲が必要であるかのように。

(5) ローマ世界誕生における戦争と平和

さて『アエネイス』後半の第7～12歌は、イタリアでの戦争の物語である。その戦いについては、放浪中のエピソードやクーマエの巫女による神託で繰り返し予告されていたが、いよいよその「恐ろしい戦争」(6.41)がここに始まる。

イタリア中部ラティウム地方のラウレンテス人を支配する王ラティヌスには、妃アマタとの間にラウイニアという一人娘がいたが、王位を継ぐべき息子がいなかった。それで年頃のラウイニアのまわりには多くの求婚者が集まってきて、なかでもトゥルヌスというアルデアの若き王はアマタにも気に入られ、王女の婿として有望な人物だった。ところが、そのとき神の予兆や予言がラティヌス王にくだり、異国からやってくる勇士を娘と結婚させるようにと告げたのであった。一方、上陸したアエネーアスは土地の王ラティヌスに使者を送り、トロイア人の定住のためにわずかな土地を分け与えてくれるようにと願い出た。するとラティヌスは、アエネーアスこそが運命によって求められた異国の人だと悟り、定住を許すのみならず、娘との婚姻をも申し出たのである。

しかし、天上からそうした動向を見た女神ユーノは、アレクトという復讐の女神を呼び出し、その残忍な狂気の女神の力でトロイア人の定住と新たな縁組を妨げようとする。アレクトはアマタとトゥルヌス、そして土地の農民たちを扇動して戦争を引き起こし、この動乱の前にラティヌス王もなすすべがなく館に閉じこもってしまう。やがて戦争の合図が鳴らされると、ラティウム全体の諸都市からトロイア人を撃退するための軍隊が集まってきた。

その間アエネーアスは、周囲で進行する険悪な状況に心悩ませていたが、夢に現われたティベリス川の神から、川をさかのぼってバランテウムという土地へ行き、そこに住むアルカディアからの移住民の王エウアンデルに援助を求めるようにとの忠告を受ける。アルカディアはペロポネソス半島の山岳地帯だから、河神のお告げは「救いの最初の道がギリシアの都から開かれよう」というシビュラの予言とも一致する。目覚めた英雄は、早速ティベリス川を遡航してエウアンデルと会見すると、以前からラティウムの軍隊の攻撃を受けていたアルカディア人の老王は、即座に援軍の提供を約束する。エウアンデルはまた、近隣のエトルリア地方で残虐な王メゼンティウスを追放した住民の軍隊が異国の指導者の出現を待っているという貴重な情報も提供して、約束した援軍とともに、その将として若い一人息子パラスをトロイアの英雄に委ねる。アエネーアスが精鋭の軍隊を率いてエトルリア陣営に着くと、そのとき天空から母ウエヌスが降りてきて、鍛冶の神ウォルカヌスに作らせた新しい武具一式を息子に渡す。その中の盾には、未来のローマ人の戦勝の歴史が見事に彫刻されており、英雄は「事実を知らぬまま絵柄に喜び、／子孫の名声と運命を肩に担う」のであった(8.730-1)。

ウエヌスがアエネーアスを支援すると、他方ユーノは反対勢力を刺激する。この両女神の対立の構図は前半の物語と変わらない。すなわち今度は再びユーノが、トゥルヌスのもとに虹の女神イリスを派遣して、英雄が留守中のトロイア陣営に攻撃を開始するようそそのかしたのである。トゥルヌスは大軍を率いて進軍し、ティベリス河口付近の敵陣に襲撃をかける。その攻撃はすさまじく、シビュラがラティウムの「もう一人のアキレウス」と述べた言葉は、たしかにこの人物のことに違いないと思わせる。彼は敵の船に火を放ち、猛烈な勢いで追ってくる。だがトロイア軍のほうは、アエネーアスの指示を守ってひたすら砦の防御に努め、相手の挑発に乗ろうとしな

い。そのため、トゥルヌスの軍隊はこの日の交戦をあきらめ、敵陣のそばで野営する。

一方その夜、トロイア方では、ニススとエウリュアルスという二人の若者が、敵の野営地を突破してアエネーアスに危急の事態を知らせる役目を買ってでる。二人は留守を預かるアスカニウスらに励まされて闇の中を出発し、眠りこんだ敵軍の中を進んでいくが、そのとき大きな手柄にはやって眠る敵兵を次々と殺し、年少のエウリュアルスは奪った武具を身に着ける。何とか無事に敵陣を通過したものの、しかし彼らはたまたま敵の本陣から派遣されてきた騎兵隊に見つかってしまう。暗闇の中でかすかに光るエウリュアルスのかぶった敵の兜が原因であった。先に捕らえられたエウリュアルスが無残に刺し殺されると、ニススも友人を殺した敵と刺し違えて果てる。息絶えてうなだれるエウリュアルスは罌粟の花にたとえられ、最愛の友の死体のうえに倒れるニススは、「安らかな死で休息を得た」(9.445)と歌われる。「運のよい二人よ！」(9.446)、と詩人は最後につけ加える。二人の若者の美しい死は、ローマの国が続くかぎり人々に伝えられるのだから、と。

翌朝の戦いは、この二人の首が槍先に刺されて運ばれる場面から始まった。激しい攻防戦が起こり、若いアスカニウスも初陣を飾るが、敵将トゥルヌスは烈火のように攻めかかり、ついに砦の門を通過して単独で陣中に突入する。だが、トロイア勢が密集隊列を組んで対抗すると、トゥルヌスはしだいに追いつめられ、川に飛びこんで味方の陣へ逃げ帰る。

このような地上での激戦の最中に、天上ではユピテルが二人の女神を集めて会議を開く。ウェヌスとユーノの言い分はいずれも、このイタリアでの闘争がトロイア戦争の繰り返しであることを前提としていて、一方はトロイア人に再び敗北をもたらさないよう訴え、他方は、再び妻が奪われたのだからとイタリア方の攻撃の権利を弁護する。女神たちの論争はまったく取捨に向かわず、結局最高神は、「王ユピテルは誰にでも公平だ。／道は運命が見いだすだろう」(10.112-3)と言って、中立の立場を表明する。

こうして運命のゆくえは、地上の人間の戦いで決定されるという形勢が濃厚となる。その地上では、敵陣を包囲するイタリア方の攻勢はなおも続き、最高指揮者が不在のトロイア勢は、防壁の中から精一杯の応戦をするほかなかった。だが、そのとき、アエネーアスが援軍を率いて帰還する。大量の援軍は、暴君メゼンティウスを受け入れたトゥルヌスの軍に敵意を抱くエトルリア各地の軍隊と、パラスのアルカディア軍団とからなり、彼らは多数の船で海路を進んで駆けつけたのである。こうして海岸付近の戦場では、両軍の本格的な会戦が始まる。

この大戦闘では、両軍とも多くの犠牲者が出るが、その中でも三人の英雄の死を詩人は詳細に描いている。まず主人公アエネーアスの華々しい戦いが語られると、詩人の視線はアルカディア軍の若い勇士パラスを追跡する。パラスは仲間を鼓舞し、先頭に立って武勇を発揮する。しかし、彼はやがてトゥルヌスと対決することになる。両者の年齢と実力の差ゆえに、これは明らかに不均衡な決闘だが、あとの物語展開にとっては重要な場面となっている。

パラスと向かい合うトゥルヌスがまず、「父親にも見物してもらいたいものだ」(10.443)と敵

意をこめて挑発すると、パラスは毅然として、「私は誉れを得るだろう。最高の戦利品を奪うにせよ、／名誉の死を遂げるにせよ。どちらの運も、父は気に入っているのだ」(10.449-50)と応じる。そして決闘が始まり、パラスは天上のヘルクレスに加護を祈る。だがヘルクレスはただ涙を流すだけで、それを見た神ユピテルがヘルクレスに、「人にはみな定まった日がある。すべての者の命は／短く取りもどせない。だが手柄を立てて名声を長く残すこと、／これこそ勇者のなすべき仕事だ」と述べ、さらに、トロイアでも自分の息子サルペドンは死なねばならなかったし、またトゥルヌスにもやがて「定められた運命」が訪れるだろうと告げる(10.467-72)。その間、パラスの投げた槍は敵に命中せず、トゥルヌスの投げ槍は相手の若い体を刺し貫いて即死させる。勝ち誇ったトゥルヌスは、のちにみずからの不運を決定づけるパラスの剣帯を奪い取る。

ニススとエウリュアルスにしても、またパラスにしても、ウェルギリウスは戦場での若者の死に特別の関心を寄せている。こうした若年の戦士たちは、死に直面しても恐怖にとらわれることなく果敢に死んでいく。ところでホメロスの『イリアス』に登場する主な英雄たちは、ここで述べられたユピテル(ゼウス)の子サルペドンを例外として、じつは死を前にした場合(最強の英雄アキレウスも含めて)たいていが強い恐れを味わっている。つまりホメロスにとっては、人間である英雄たちが、自己の存在を無に帰する非情な死に対する恐怖をどのようにして克服するのか、それが重大な問題だったのである。ギリシア語では、人間の死の運命は「モイラ」(moira)であり、その語はもっぱら個人の生死の宿命を指していた。自分自身の命の果てを目前に見て誰もが抱く強い恐怖感、それにじっと耐えながら、宿命を受容して戦いに向かう英雄の心の状態にこそ、ホメロスは深い関心を示したのである。ホメロスの英雄たちは、こうしてみずからの運命(moira)を完成させる。

それに対してローマ詩人ウェルギリウスは、多くの年若い戦士の死を「美しい死」、すなわち英雄サルペドンの死を典型とする理想的な名誉の死として描こうとした。「美しい死」を死ぬそれらの青年たちは、自己の運命を受け入れる心の葛藤を経験することはない。ラテン語では人の死の運命はファータ(fata)だが、その言葉は同時に最高神が決定した世界の運命をも表わしており、詩人はその両義的な意味にもとづいて、個人の死(ファータ)を世界の運命(ファータ)、とりわけローマの運命と結びつけようとした。物語の若い勇士らは、自己の死がローマの運命につながっていることを認識せずに死んでいく。それは典型的な「美しい死」であり、その無知な純粹さゆえに彼らの死は未完成のままなのだ。彼らの運命の完成は、彼ら自身ではなく、物語の未来がもたらすことになる。つまりローマの未来こそが、若者たちの死を意味づけるのである。

さて、パラスの戦死を知ったアエネーアスは、激しい復讐心に燃えて殺戮に荒れ狂う。しかし、仇敵トゥルヌスはユーノの策略によって戦場から遠ざけられ、彼はエトルリア人の憎悪的となったメゼンティウス王と対決する。相手はラティウムの軍勢中トゥルヌスに次ぐ強豪だが、アエネーアスは投げ槍で敵を負傷させ、剣でとどめを刺そうとした。だがその瞬間、メゼンティウスの若い息子ラウススが、戦闘不能に陥った父をかばって挑戦してきた。アエネーアスはこの年

下の若者との対戦を避けようとするが、我を忘れて勇みたつ相手を制止しえず、剣で刺し殺してしまう。英雄は青ざめていくラウスの顔を見て深く悔やむのだが、もう遅かった。そして若者の死体は、傷ついて川辺で休むメゼンティウスの前に運ばれていく。そのとき息子の遺体を見た父親は、いたずらに命に執着して、わが子を見殺しにしてしまったと激しく嘆き、再び決闘にのぞむ決意をする。メゼンティウスは堂々と戦い、「息子と墓を分かち合うことを許してくれ」(10.906)という最後の言葉を残して倒れる。若年ながら見事な孝心と勇気を示すラウスと、憎むべき暴君から息子の愛によって過去の非道を悔いる父親に変身し、潔い最期を遂げるメゼンティウス。このようにトロイア人の敵たちの死についても、詩人はローマの運命に捧げられた犠牲として深い同情と敬意をこめて語っている。

こうして両軍とも大きな被害をこうむった大戦闘の翌日、アエネアスは悲嘆と悔恨の念にさいなまれながら、パラスの遺体に最後の別れを告げ、葬列をパランテウムへ送り出す。そこへラティヌスの都から使者が来て、死者埋葬のための一時休戦を申し出た。それに対して英雄は、「戦死者のために平和を／乞うのか。私は生きている者にもそれを与えたいものだ」(11.110-1)と述べ、トロイア人は運命にしたがってこの地へ来てラティヌス王の客となったが、その契りを破って事態を戦争で解決しようとするのなら、トゥルヌスこそが単独で自分と対決すべきだと言い渡す。一方、エウアンデルのもとにパラスの遺体が到着すると、王は悲しみにうちひしがれ、アエネアスが必ずトゥルヌスを討って、息子の死の復讐を果たしてくれるようにと伝言する。

多数の人命を失ったラティウムの人々の多くも、トゥルヌス自身が決闘で戦争を終決させることを願っていた。ところで先にラティウム陣営は、南イタリアに住むギリシアの英雄ディオメデスに援軍を求めていたが、今その使者がもどり、ギリシア軍にさえ恐れられたトロイアの勇士と敵対するよりは、むしろ即座に盟約を結ぶべきだと逆に警告を受けて、支援の懇願はきっぱりと断られたと報告する。そこでラティヌス王は召集した会議の席で、もはやトロイア人たちとは講和を結ぶべきだと提案する。そのとき王の提案に賛同したドランケスという雄弁な人物が、講和に不服なら自分の実力だけで相手と立ち向かうようトゥルヌスに行動を促すと、トゥルヌスはその挑発的な言葉に激昂して、まだ自分の軍隊には十分な戦力があると主張し、また必要な場合には決闘も辞さないと断言する。

しかし、その間にもトロイア方はラティヌスの都へ軍隊を進めた。ただちにラティヌス主催の会議は中断し、トゥルヌスは戦闘を再開する。アエネアスは、先に平原から騎馬隊に攻勢をかけさせて敵軍を誘い出し、自身は別の部隊を率いて尾根にそった道から都を攻撃するという戦略を立てた。だがその情報を聞いたトゥルヌスは、カミラという乙女の戦士が率いる騎馬軍に平原から来る敵の軍隊を迎え撃たせ、自分は尾根づたいの道の近くでアエネアスの部隊を待ち伏せして都を守ろうと思いつく。しかし、トゥルヌスの作戦は失敗する。カミラの軍隊は奮戦して幾度も敵軍を押し返したが、指揮をとる彼女自身が戦利品に目を奪われて油断したすきに投げ槍に撃たれて倒れ、そのためラティウムの軍勢はいつせいに逃亡したからである。カミラの死と軍の

敗退が伝わると、トゥルヌスも待ち伏せを放棄して城壁の中へもどる。トロイア軍は、こうしてラティヌスの都の真ん前に陣を構えることになった。

ラティウム陣営の敗色はもはや誰にも明白となった。トロイア軍は、このまま都を総攻撃すれば容易に勝利を得られたはずである。ここで読者は、巫女シビュラが予言したイタリアでの「トロイア戦争」は、いつのまにか攻防の立場が完全に逆転してしまったことに気づくであろう。この「花嫁」をめぐる戦いでは、最初はトゥルヌスの側がかつてのギリシア軍に相当し、「花嫁」を奪うトロイア勢を攻めているように見えたが、しかし今や、以前のギリシア軍のように「花嫁」を要求して城壁を包囲しているのは明らかにトロイア勢であり、一方トゥルヌスは、前のトロイア人のように城壁を守る立場に追いこまれている。七年前にギリシアがトロイアに勝利したように、今度はトロイア人がイタリアの都市を攻略できる軍事的優位を確保したのである。『イリアス』では、アキレウスがヘクトルを倒してギリシアの勝利とトロイアの滅びの命運を決定づけた。つまり戦争とは、二つの集団を勝者と敗者とに明確に分けるための闘争であった。だからイタリアでの戦いが第二のトロイア戦争であるなら、今やトロイア人こそ、かつてのギリシア人のように勝利の凱旋を手中に収めるべき時なのである。

ところが詩人は、こうして以前敗れたトロイア人が勝者の地位を獲得できる機会を周到な物語の運びによって準備しておきながら、最終的な段階でギリシア以来の伝統的な戦争の論理をくつがえす展開を創りだす。というのは、アエネアスがラティヌスの都に直接攻撃をしかけた目的は、敵を一挙に攻め落とすことではなく、あくまでも敵軍の中心人物トゥルヌスに決闘を受け入れさせ、互いの戦禍を最小に抑えて事態の解決をはかることだったからである。しかも、決闘の条件は、けっしてトロイア側にとって有利な内容ではない。

翌朝、城壁の前の平原に両軍がいつせいに対峙したとき、衆目の中でアエネアスが決闘のためにラティヌスに誓った言葉によると、トゥルヌスが勝った場合には、トロイア人は武力を放棄してエウアンデルの都市へ退却するが、他方アエネアスが勝利を得たならば、トロイア人とイタリア人は勝者と敗者の区別なく、いずれも対等の権利を保ったまま「永遠の盟約」(12.191)で結ばれることが取り決められる。そのうえ後者の場合には、融合した両民族の統治権(imperium)を握るのは敗軍の王ラティヌスであり、アエネアス自身は、新たに妻とする王女の名にちなんだラウィニウムという都市に住み、宗教と祭事のみを司るであろうと言う。このように英雄の戦争の目的は、勝負の結果がどうであれ、ともかく平和が確保されることであり、従来のように勝った側は勝利の権利を行使して敗者を滅ぼしたり、威圧的に服従させたりしないことなのである。平和の成就を前提とするこの戦争のポリシーは、冥界でアンキセスが教えた未来のローマ人の使命を反映しており、ここでアエネアスは、すでに最初のローマ人として行動していて、また、ここに投影されたトロイア人とイタリア人の新しい共同体はすでに、将来地中海の周辺全域に広がるローマの多民族市民社会の原型をなしている。

古代ギリシアでは、「なしたる者は罰を受けるべし」(drasanti pathein) という報復の正義に

もとづいて戦争が行なわれ、したがって、平和は限りなく続く攻撃の応酬の合間の一時的な休息にすぎなかった。そのような永続的な戦いの状態がギリシア世界に活力を与え、ホメロス以来戦争の中に人間の生命の輝きと美が追求されたが、しかし民族の歴史を考えるなら、ギリシアは戦争そのものに人間存在の価値を置くそのような見方のためにやがて衰退の道をたどった。もちろんギリシア、とくにアテナイには民主主義という画期的な政体があったが、その民主主義は、じつは民族・国家間の平和とはあまり結びつかず、むしろ対外戦争の推進と足並みをそろえて発達したのである。そうしたギリシアの戦争観に対して、ウェルギリウスは『アエネーイス』の結末において、戦争自体を目的化せず相対的にとらえ、それを平和確立のための手段として位置づけるローマ人の新たな戦争の理念を示して、その理念が現実の歴史の中でどのような障害に直面しながら実現していくのかを、神話に託して描こうとしたと言えるであろう。というのも、物語の最後では、トゥルヌスはたしかにアエネーアスとの決闘に敗れてイタリアの平和は成立することになるが、しかしそこにいたる経緯には、短時間の出来事の中にローマの歴史を凝縮したような緊張感あふれる場面が含まれるからである。

アエネーアスとラティヌスの誓約を聞いたトゥルヌスは、決闘の場にのぞみながら、周囲に加勢されて態度を翻す。彼にとっては決闘の条約は、それを可能にするための休戦だけで十分であり、勝負のあとの事態を先に取り決めることは、すで講和が成ったも同然である。つまり、決闘は勝者に敗者の処遇についての全権を与えるべき行為であって、だからこそ、もはや味方の軍隊の力不足を悟ったトゥルヌスは、トロイア人をイタリアから完全に排除する最後の望みを単独の対決に委ねたのである。ところが両陣の代表による誓約では、勝負の結果は、民族の共存か融合かの違いはあっても、トロイア人をイタリアから追い払うことにはならない。それでは、決闘で勝利を目指す意味はないのである。女神ユノーの指図で休戦協定が破られて大乱戦の状態になると、トゥルヌスは戦場を駆けめぐって殺戮を繰り返す。それは、彼が卑怯なために対決を避けたためではないだろう。要するに、アエネーアスとは戦争のコンセプトがまったく異なるのであり、勝敗の結果にすべてか無かを託すトゥルヌスのほうが、ギリシア的な見方からするとむしろ英雄的である。

一方アエネーアスは憤怒に駆られ、対決から逃げるトゥルヌスを鬼神のように追いかける。そして決闘を再開させるために、ラティヌスの都に火を放って襲撃するという最後の武力的手段に訴えた。王宮では王妃アマタが絶望のあまり自殺し、都から大きな叫喚が起こる。その騒然たる味方の様子に気づいたとき、ようやくトゥルヌスは方針を変え、アエネーアスと立ち向かう決心をする。

その間天上では、ユピテルとユノーが話し合い、最高神は妃に、もう運命に抵抗するのはやめるよう言い渡す。すると神々の女王は、トロイア人が以前の言語も風俗も完全に失って、勇壮なイタリア人の血統の中に溶けこんでしまうことを条件に、トゥルヌスの敗北を承諾する。ついにローマ民族の誕生について、神々の平和（*pax deorum*）が成り立ったのである。しかし地上

の決闘では、天界の神々の平和とは対照的な結末を迎える。この全篇最後の場面は、ローマ人の平和をめぐる詩人の想念の奥行きを表わす最も印象深いシーンである。

まずトゥルヌスの投げた巨岩が力なく地面に落ちると、アエネーアスは「運命の槍」(12.919)を放った。ところが、運命の成就を担ったその槍は、急所をはずれて敵の腿に刺さり、トゥルヌスはひざまずいて嘆願する。もはや自分は敗北を認めるが、遺体だけは老父に返してほしい、と。アエネーアスは一瞬、とどめを刺すのをためらう。だがそのとき、敵の肩にかけられたパラスの剣帯が目映った。殺されたその若い友人の武具は「残酷な悲しみを思い出させ」(12.945)、英雄は激しい怒りに燃えて相手の胸を刺し貫く。

物語の全篇は、トゥルヌスの「命はうめきつつ、憤りを抱いて死霊の国へ立ち去った」(12.952)という詩行で終わっている。冥界でアンキセスは、「服従する者は許す」ようにと教えていた。それゆえ復讐の怒りに駆られて敵を殺すアエネーアスは、理想的ローマ人としては問題があることをこの衝撃的な結末は語っているのだろうか。しかし、パラスの死に対する復讐は明らかに物語の伏線になっており、アエネーアスが最初から報復の一撃のみでトゥルヌスを倒すというもつと単純ななりゆきも十分考えられたはずである。にもかかわらず詩人はここで、英雄が負傷した決闘相手の嘆願を聞き、殺すのをためらうという、ホメロスの場合ならばありえない異例の状況を設定した。この屈曲した事態はむしろ、主人公がパラスの剣帯を見る瞬間まで私怨をすっかり忘れていて、ひたすら講和の実現という公的な目的だけを目指して決闘にのぞんでいたという事実を改めて示しているのではないか。

いずれにしても、直前の天上の場面では、これまで執拗に対立してきた神々が穏やかに会話を交わし、じつに容易に平和を成しとげたが、その神々の平和と比べると、人間界の平和達成の瞬間は、言葉での相互理解がきわめて困難で、当事者双方の苦難と苦渋にみちた体験として描かれている。そこには、勝利の凱歌などまったくありえないのである。

平和という言葉は、たしかに美しく、誰の耳にも快く響く。だが、それを人間が現実に作りだすのは容易なことではない。ましてや神々がローマ人に求めたのは、「永遠の平和」(aeterna pace: 12.504)のもとに世界を統治することであった。それは、さまざまな義務や価値観に縛られ、認識能力や肉体の力も有限な人間にとっては、とてつもなく困難な事業であろう。それでも、いや、むしろそれゆえにこそ、歴史においてローマ人とローマ国家は、その使命を真摯に担って存続してきたし、またこれからも平和のためのローマ人の闘いは、はてしなく続いていくであろう。

3. むすび——ローマ人の平和

「見よ、プリアモスを。ここにも栄光は、その報酬を受けている。

ここにも人の世を思う涙があり、人間の苦しみは人々の心を打つ。」 (Aen.1.461-2)

英雄アエネアスは、かつて放浪中嵐に襲われてカルタゴに漂着したとき、ユーノの神殿を飾るトロイア戦争の絵画の前で、このような言葉を漏らしながら涙を流した。それは、トロイア人たちの悲惨な敗北の場面も写實的に描いた絵であったが、彼はそれを見て、初めて救いを望む気力を感じたと語られている。

祖国を滅ぼした凄惨な戦いも、芸術作品として描かれることで、つらい苦しみは償われ、人に慰めと生きる勇気もたらされる。それは文学でも同じであり、そのような悲劇的感情の体験こそ、ホメロスの叙事詩が数知れぬ聴衆や読者にもたらし、その後ギリシア悲劇の創作と鑑賞に受け継がれたものであった。ウェルギリウスは、ホメロスに始まるそうした物語作者のエートスを、ローマ世界において継承した詩人である。

しかし、このローマ詩人は他方、ギリシアの作家たち、とりわけホメロスとは異なり、はてしない人間の戦争そのものではなくて、戦争のかなたに約束された揺るぎない平和に視線を向けながら神話と歴史を語ろうとした。戦争を超克した永遠のローマとその平和の理想は、人間が民族や人種を超えた共生のための秩序を創造できる存在だという確信によって支えられていたが、ウェルギリウスはそのような人類の夢と人間への信頼を、ローマ建国の神話に託して歌ったのである。そうした古典文学では独自の着想は、神々の描き方の違いにも表われている。

例えばホメロスの『イリアス』に登場する神々は、トロイアの平原で異なる民族の英雄たちが死闘を繰り広げる様子を、いつまでも楽しげに眺めている存在であった。つまりホメロスの神々の無上の喜びは、命のかぎりある人間たちが、その有限の生命を賭けて真剣に戦うさまを、あたかもスポーツの観客のように天界の高みから見物することなのであり（ただし神々は熱中のあまりときどき地上に降りてきたりするが）、彼らはトロイア戦争という大試合の観戦をこれからも繰り返し楽しみながら、永遠の時間を過ごしていくことであろう。

もちろんウェルギリウスが描く神々もまた、天上にいて人間界の波乱を見つめている存在であることには変わりない。しかし、詩人が作品に登場させた神々には、ホメロスの神々に比べると、人間の歴史に対する関心と関与の度合いが著しく大きい。それらの神々は、トロイアやカルタゴやローマに対して特別の関係と執着を持っていて、互いに異なる思惑を抱きながら地上の動きを凝視し、ときには下界に大きな影響力をおよぼす。そして世界の「運命」(fata)は、地上で個人としての運命(fata)を生きる人間にも、天界で永遠に暮らす神々にも等しく深くかかわっていて、天上と地上の両方の側の動向によって世界の形勢が決定されていく。しかも、神々の関心の対象が主に人間の社会集団であるかぎり、神と人間の双方を巻きこんで展開し続ける「運命」には終わりがなく、また、それが後もどりすることや、まったく同じ出来事を繰り返すこともない。要するに、ウェルギリウスの神々は人間とともに世界をつねに新たに創っていく存在であり、両者がそれぞれの領域での対立・衝突や合意形成によって進める歩みは、いつも一回かぎりでありながら、しかし永久に続いていく歴史のプロセスそのものである。

『アエネーイス』は、そのようないっそう実在感のある神々と人間たちの共演のドラマをさま

ざまな撮影技術を駆使してまとめ上げた大叙事詩である。トロイア人の長い流浪と戦いを語るこの作品には、前章で述べたように最後の勝利の喜びもイタリア人とのめでたい和解の場面もなく、苦々しい戦闘に敗れて地下の闇へ去っていく敵将トゥルヌスの魂の悲憤で幕が閉じられている。しかし、この騒然とした余韻を残す突然の結末もまた、夜明け前の嵐で終わる映画の最終場面にも似た、詩人のカメラワークなのである。

この劇的な決闘のあとには、それに先立つ両陣営代表の誓約と天上の神々の合議の脚本どおりに、トロイア人とイタリア人の民族統合によってローマ人が誕生し、必ず世界の平和への歩みが始まることになる。新たな融合民族ローマ人の前途には、たしかにアウグストゥス時代の「ローマの平和」(pax Romana) 確立にいたるまで、なお一千年以上も続く長い戦いの歴史が待っている。しかしそれでも、平和への道の最初の一步は、ここで確実に踏み出された。その決定的な第一歩こそ、『アエネーイス』の最終メッセージであり、この文学作品が人類の文明と歴史に対して今日なお伝え続けている普遍的な理念である。ローマ世界は、こうして『アエネーイス』とともに、戦争と滅びの中に人間存在の証しを求めたギリシア世界の死の美学から決別し、生の哲学と他者との共生の政治学へと進んでいったのである。

(本稿は2および3章において、拙著『ウェルギリウス『アエネーイス』——神話が語るヨーロッパ世界の原点』(岩波書店、2009年2月)の一部を改稿して取り入れている)

AbstractWar and Peace in Greek and Roman Epic Poetry
— Homer and Virgil —

OGAWA, Masahiro

This paper discusses on the conceptions of war in its relation to peace which appear in Homer's *Iliad* and Virgil's *Aeneid*. In the *Iliad*, although war is represented above all as a situation where individual warriors strive to win their fame and glory, it is also perceived as a source of mental and physical sufferings for many people and as an inevitable hard condition of human existence which is determined by gods or fate and continues for ever. On the other hand, Homer inserts into his narrative various sights of the peaceful world by means of soldiers' "obituaries" and the similes. Especially in the description of the shield of Achilles, he puts warfare in contrast to peaceful life and makes us see war in perspective. We can understand what the peaceful scenes depicted on this weapon mean, if we consider their context: the greatest hero who goes to fighting with this divine shield will never fail to kill Hector and in consequence to bring destruction to Troy as well as an early death to himself. Thus the picture of the shield stands for what all the men concerned with war have to lose definitely. In so deeply tragic a poem as the *Iliad*, there is a distinct, insuperable gap between war and peace.

The *Aeneid* is another tragic epic as many readers appreciate today, though it shows a different view of war and peace. In the first half of the poem, Aeneas is often described as wavering between these two opposite modes of human life. Being no longer confident of the traditional value of heroism after his experience of the destructive and mad force of war on the last night of Troy, he is inclined to find a peaceful life during his wanderings (at several places like Crete, Carthage and Sicily), but it always proves to be an illusion. The predictions are also ambiguous about the future, announcing war as well as peace in Italy. But when he has heard Sibyl's oracle of the impending battles in Latium and has listened in the underworld to his father's prophetic instructions on the Roman mission, Aeneas acquires a new idea of the war which is neither incompatible with peace nor excludes it but should serve to bring about and establish it in the world. He never knows how he can carry such an idea into practice and we see many difficult problems in the course of terrible war narrated in the second half of the poem. But in the last book, Virgil makes us witness the first step being taken in battlefield towards peace: Aeneas and Latinus swear the oaths to end the war without making the conqueror nor the conquered. Although the duel between Aeneas and Turnus comes to a truly tragic ending, the definite step is marked nevertheless. This is the last message of Virgil, which he leaves for us to think about in our still disturbed history on earth: what is war for, if not for peace?